

主語としての意識 ——注意と意識の言語的構造——

Consciousness as a Subject: The Linguistic Structure of Attention and Consciousness

川津 茂生 KAWAZU, Shigeo

● 国際武道大学 元教授
International Budo University former professor

Keywords 注意, 意識, 述語的記述, 受容性, エントロピー
attention, consciousness, predicative description, acceptance, entropy

ABSTRACT

初期視覚と Attention の機能を見直し、動機づけの働きを考慮に入れるために、特徴の検出と統合を言語プロセスになぞらえ、特徴の述語的記述によって描かれる主語的表現として捉える。述語的記述は受容性であり、それを受容するのが主語的表現としての意識である。述語的受容性は環境の負のエントロピーの受容性であり、また偶然性の受容でもある。偶然性を受容した述語的記述を受容することで、主語的表現が生まれ、〈文〉が成立し、そこから命題と論理が抽出可能となる。偶然性の受容を通して前論理的構造から論理的構造が生まれてくる。そこに成立する一人称の意識は、物質的な必然性の支配から自由な自律した思考が可能となる。そこに物質と精神が連続しつつお互いに自由である関係が成立する。

In order to review the functions of early vision and attention and to take into account the motivational function, we compare the detection and integration of features to a linguistic process and consider them as subjective expressions depicted by the predicate description of features. Predicate description is receptivity, and it is consciousness as a subject expression that accepts it. Predicate receptivity is the acceptance of the negative entropy of the environment, as well as the acceptance of chance. By accepting predicate descriptions that accept chance, subjective expressions are born, sentences are established, and propositions and logic can be extracted from them. Through the acceptance of chance, a logical structure emerges from a prelogical structure. The first-person consciousness that is established there enables independent thought free from the domination of material necessity. This is where matter and mind are continuous and mutually free.

1. Attentionの二つの意味

Attentionには二つの意味がある。意識を向けるという意味と配慮や気配りという意味である。

認知心理学では、Attentionはおもに一番目の意味で用いられている。Treisman & Gelade (1980) は、特徴統合理論を発表した記念碑的な論文で、対象の独立に処理された複数の特徴が、Attention

を向けることによって再結合されることを示したが、そこで Attention は知覚における認知的機能の面から理解されている。

初期視覚で独立に処理された特徴がどのように結合するかは、認知心理学の重要な問題である。Attention が注がれることによって特徴が結合するという機能的な理解は、知覚と意識の心理学を大きく前進させた。

しかし Attention を機能的な意味だけで理解することは、認知心理学の観点から見ても、不十分だと言わざるをえない。上記の Treisman & Gelade (1980) の研究では、特徴情報の再結合のために Attention が必要だとされたが、Attention がどのようにして情報を統合させるのかは必ずしも明らかにされていない。複数の特徴情報を何らかの形で近接させたとしても、それで情報が結合し統合されたと判断することはできない。意識を向けることが情報の結合・統合の必要条件だったとしても、十分条件だとは言えないのである。情報の結合・統合のためには、Attention の認知的な機能だけでなく、対象を一つの存在として包み込むような配慮や気配りの動機づけの側面も必要ではないだろうか。

Simone Weil (2002) は、Attention で、自己を虚しくして他者が他者として現れてくるのを待ち受ける態度や姿勢をさし示した¹。Weil は、困難な人生を生きる中で、Attention の考え方を徹底させたのである。他者を待つ姿勢としての Attention に包まれて、他者の存在の真の姿が立ち現れる。立ち現れる対象を人間だけでなく、生活で出会う事物にまで拡大するなら、待ち受ける姿勢という意味での Attention は、対象が現れてくる現象学的な地平を形成しているとも言えよう。Attention は対象の存在を包みつつ肯定する姿勢なのである。その姿勢のもつ対象を存在として包んでいく力が、機能的な理解だけでは十分に説明できなかった特徴情報の結合・統合を、よりよく説明できるのではないだろうか。

2. 特徴の述語的記述

特徴の結合・統合にさいして、Attention の認知

的機能だけでなく、動機づけ機能も同時に働いていることを、初期視覚過程の全体を言語プロセスに準えることにより、モデル化することができる。

まず初期視覚における特徴情報の検出や記録を、言語に準えて、特徴の述語的記述として捉える。赤く丸いボールの情報処理を「赤く」て「丸い」という特徴の検出や記録としてだけではなく、むしろ「赤く」て「丸い」という特徴の生理学的な述語的記述であると考えるのである。述語的記述は対象の特徴の記述であり、述語的記述が統合されて、対象の表現が主語として脳内に成立する²。

自然言語では、述語的記述がまずあり、その後から主語が立ち現れてくるという順序は、必ずしも一般的ではない。しかし時枝誠記 (1941) は独自の言語過程説に基づいた日本語文法において、「主語は、述語に対立したものとして表出されているのではなく、述語の中に隠されて居ったものの、包まれて居ったものが外に表出される様になったものと解すべきである (p. 371)。」

と述べ、さらに

「言語は、誰 (主体) かが、誰 (場面) かに、何物 (素材) について語ることによって成立するものである (p. 40)」

とも述べている。

時枝ように言語をプロセスとして捉えれば、述語がまず語られ、その後で隠されていた主語が表出するという順序が想定できる。この見方に準えるなら、生理学的な述語的記述がまずあって、そこから伏在している主語が表出してくるというプロセスを想察できる。

日本語における述語性の優位は、場所あるいは場面によって包み込んでいく受容性の優位でもある。類比的に、述語的記述は述語的受容性であるとも言えよう。述語的受容性に主体的表現を見るなら、述語的記述は主体的な受容性の表現としても理解できる。対象への主体的受容性は、人間的な感情に準えれば、他者を待ち受ける姿勢とも言える。

視覚処理の始まりにおいて述語的記述を見ることは、処理の開始から主体的受容性が働いている

と理解することでもある。言語プロセスに準えたアプローチによって、Attentionの働きを含めた初期視覚のあり方全体の概念的組み換えの必要性が見えてくる³。

3. 主体的表現としての述語的記述

述語的記述は主体的な関わりのプロセスである。それは、たんなる情報処理ではなく、対象への主体的な関わりの表現なのである。対象の特徴はたんにニュートラルな情報として処理されるのではなく、関わりとしての述語づけなのである。したがって特徴の統合もたんなる機械的再結合ではなく、むしろ主体的関わりとしての述語的記述が纏まりのある輪郭を描くことにより、対象の表現の纏りが形成されていくのである。文学的に表現すれば、複数の生理学的な述語的記述が、あたかも言葉で述語を連ねて何かを描写するときのように、対象の表現を次第に構成していく。網膜で光を受容した瞬間から主体的な関わりとしての述語的記述が始まり、それらがあたかも言葉のように連なり、〈主語〉としての対象が表現されていく。

主語不在のまま述語のみを連ねていく言語表現が、いまだ知られていない何ものかのシルエットを言葉のタッチで描くように、特徴の述語的処理の連なりが表現されるべき対象のシルエットを描出していく。俳諧では述語的表現の連なりが中心としての主語が不在のまま、述語横断的に増殖し、詩人の言葉はあたかも絵筆のタッチのように何かを描いていく。同様に、脳内の特徴の述語的記述も、対象の表現を描く生理学的なタッチなのである。

4. 受容性としての述語的記述

特徴の述語的記述は、対象を受容し肯定している。対象の特徴は肯定も否定もなく、ニュートラルな値として機能的に検出され記録されるのではない。ここで肯定というのは、知覚された対象が、生体にとって有益かどうかという基準で判断された意味での肯定ではない。むしろ対象が存在していることそれ自体に対する肯定なのである。生体

にとっては有害である対象であったとしても、対象の存在は確認されなくてはならない。そのためには、まずもって対象の存在を明確に肯定する必要がある。したがって、述語的記述が肯定の意味での受容性であるということは、外部環境とそこに存在する対象を明確に知覚するためには不可欠の根本的肯定なのである。

網膜での光の受容から外部との関係性が始まる。関係性は受容性であり、肯定でもある。肯定がなければ、関係性は持続せず、終了してしまう。生理学的述語が描く輪郭は形象となって、対象の存在を表出する。述語の連なりによって形成される輪郭（シルエット）が、あたかも図地反転するかのようにして、シルエットに囲まれた形象を対象の表現として浮かび上がらせる。肯定的受容性としての述語的記述の連結が、Predicative Embrace⁴によって肯定する対象を包み込み、対象の表現が主語の役割を担って成立する。特徴の述語的記述は、アンカーとなるべき主語としての対象の表現が成立するまでは、述語横断的に連結されることも可能で、述語同士の不安定な結合もありえる⁵。

5. 〈受容性の受容性〉としての主語的意識

述語的記述から対象が主語として生まれる。述語的受容性は主語が誕生するための母体なのである。主語はいわば、述語的受容性を受容することで生まれてくる。したがって主語は〈受容性の受容性〉であるとも言える。述語的記述は対象に対する受容性であり、その述語的受容性をさらに受容する二次的な受容性として対象の表現が主語として誕生する。したがって述語的記述と主語的表現は、同一の平面内で分析可能ではなく、ランクが異なっているのである。述語的受容性を受容することで、対象の表現が意識において主語として現出する。

この分析では、知覚を対象の受容性としての述語的記述と、その二次的な受容性としての主語の現出として整理した。対象の受容としての特徴の述語的記述から始まり、受容性の原理を重ねる

ことで、述語的記述から主語的表現が誕生してくるプロセスを「言語的構造」になぞらえて分析してみたのである。

6. 述語的受容性の起源

初期視覚を、たんなる特徴の検出や記録を越える受容的な述語的記述として捉えることは、環境の安定的秩序を受容し吸収する生命の本質と合致する。生命は環境の秩序を吸収し受容する。逆に見れば、環境的な秩序は生命に対する受容的肯定であるということもできる。

環境が生命を肯定することは、科学的には、局所的な低エントロピー状態が、偶然にも、地球環境に存在したことに基づいている。生命による環境内の低エントロピー状態の受容としての述語的記述から、対象の主語的表現が形成されてくるのである。

環境は、偶然性により、生命の維持に相応しい秩序をもった。生命は環境の秩序からの肯定を受容し、対環境的には安定した秩序を維持するのに適した行動をとる。環境と生命の間には、秩序を指向する相互受容的な同調関係があるとも言える。

生命は、偶然的に存在した環境内の局所的な低エントロピー状態に対する開かれた受容性として存在する。環境の秩序による偶然的な肯定に、意思的な肯定を読み込むことはできないが、偶然性による環境からの肯定と受容を与えられた生命が、応答的に環境を肯定し受容することは、人間的な解釈を排除した上でも、十分に認めることができるだろう。

このような見方により、他者を待ちつつ受容するという明らかに人間的な動機づけの観点から導入された、Attentionと初期視覚の概念的組み換えのステージを、自然科学的な範疇へと戻していくことができる。

7. 偶然性と必然性の響き合い

主体性と受容性の始まりが、偶然性により存在

した環境の低エントロピー状態に遡るという理解は、極めて重要である。

主体性と受容性を初期視覚に認めることは、通常は、人間的な解釈を科学的探究に持ち込む錯誤だと判断されるだろう。しかし Schrödinger (2017) の言うように、生命が生きているために「周囲の環境から負エントロピーを絶えずとり入れる」のであれば、そこに生物学的な意味での受容性の起源を見ることができる。

重要なことは、負のエントロピーの存在が、偶然性によるということである。そもそものはじまりが偶然性にあると理解することで、環境と生命の間の相互受容的な関係も、自然科学的な範疇で理解可能となる⁶。

偶然性によって存在する負のエントロピーとの響き合いの中で、生命は生きている。その響き合いを止めてしまえば、生命の流れは途絶えてしまう。

生命が機能的にはメカニカルな生体情報処理をしているのだとしても、そこにはメカニカルな必然性からは導出不可能な、偶然性による負のエントロピーの供給がある⁷。必然性を原理とするメカニカルな生命に対して、つねに環境からの偶然性が供給されている。供給される偶然性は内容的には負のエントロピーなのである。

生命は本質的に、偶然性を受容し吸収して生命を維持している。生命が機能的にはメカニカルな情報処理をしているのだとしても、それに対してメカニズムを攪乱する可能性すらありえる偶然性がつねに供給されている。しかしそれは必ずしも乱雑さを生み出すことはなく、むしろ秩序を生み出す。

とすれば必然性が支配するメカニカルなシステムが、つねに偶然性の介入によりシステムの改変を余儀なくされているという可能性もあるだろう。すなわちシステムがおそらくハードウェアも含めて間断なく改変されることで、生命が維持されているという可能性である。

そのようなシステムでは、計算の実行はシステムの改変によってつねに中断される。そこに混乱が生じないのは、介入してくる偶然性が基本的に

負のエントロピーを指向するからである。必然性を越える自由に近いものを生命がもつとすれば、それは偶然性の介入があるからではないだろうか。

8. 受容と誕生

述語と主語の間には受容と誕生の関係がある。受容による誕生という構造は、一般的である。養育者の受容的な愛情により、子どもの自己が成長し自我が確立する。また日本語日本文学では、場面的な述語的表現から主語的表現が立ち現れる。さらに脳における生理学的な述語的記述から主語的な表現が誕生する。

主語的な表現は受容的述語的な場面によって形成される母体Matrixから生まれる。ここで重要なことは、主語的表現が〈受容性の受容性〉として生まれるということである。述語的受容性は場面的かつ場所的で包み込む働きがある。それに対して、主語的受容性は場所的に包み込む述語的受容性を一点に焦点化して受容する。場所的受容性を受容するのは、広がりをもつ点としての主体である。主語的表現は自体的な存在ではなく、受容性を受容することで存在し、母体としての述語的受容性からは一世代下ったランクの異なる受容性である。

生理学的な主語的表現は意識の萌芽であり、それは一人称的であると同時に〈受容性の受容性〉として、外界の対象を間接的に受容する意識でもある。主語が述語を受容し、述語が対象を受容しているからである。対象が三人称であれば、意識において一人称・三人称関係が成立し、対象が二人称であれば、意識において一人称・二人称関係が成立する。

ここで重要なことは、生命に対する受容性は、生命が誕生する以前から地球環境に偶然性によって存在していたということである。それは局所的にたまたま秩序を保たれたエントロピーが低い環境であった。生命が負のエントロピーを摂取するということは、偶然的に存在した安定的で受容的な秩序を受容するということである。生命による

負のエントロピーの摂取自体が、受容性を受容することなのである。

受容性としての述語的記述の連なりが輪郭を描き、それを受容する対象の表現が主語として現れる。主語は述語的受容性をさらに受容するのである。主語と述語の結合によって成立する〈文〉の形式は、環境的受容性から始めれば〈受容性の受容性の受容性〉なのである。

9. 意識の理論

意識の統合情報理論は情報が統合されることによって意識が成立するという理論である。独立した情報が統合されて意識が成立するという考え方には、一定の説得力がある。しかし、この理論は基本的に情報処理を前提しており、情報量の考え方が中心にある（Tononi & Massimini, 2015; 土谷, 2022）。

意識の自由エネルギー原理は、脳が統計的な推論をしており、推論に際して、自由エネルギーを最小化するという理論である。そして推論によって、「生物は、自分自身が世界の中に存在するものとして世界をモデル化する。わたしが世界の真のモデルをもち、その場合に限って「わたし」が存在する」と考えるのである（乾・坂口, 2021）。

これら二つの理論は、基本的に情報処理の考え方に基づいている。情報処理理論は、基本的に自然科学の考え方に基づいているので、関係性を原理的に捉えられない。したがって、どうしてもそれ自体的なモデルの作成に終始してしまう傾向がある。

関係性を原理に導入することは、科学理論では極めて困難である。しかし、すでに指摘したように、感覚受容に始まる外界からの入力を述語的記述として捉え、しかもそれを述語的受容性と捉え直すなら、環境と生命との間の相互受容性の関係を以って、科学的な観点からも承認可能な形で、関係性を原理的に回収することができる。

情報ということを、広い意味で述語的記述として捉えることができれば、情報の統合は述語的記

述の連なりから主語的表現が成立してくる過程として読み替えることができる。また、自由エネルギー原理については、脳が自由エネルギー原理に沿った形で行う統計学的な推論を、負のエントロピーの受容と見れば、受容性の原理から読み直すことができるだろう。

このように2つの主要な意識の理論の読み替えを考えるのは、そうすることで、受容性としての述語性を受容する主語的な表現という定式化によって、意識の理論を情報処理の理論ではなく、むしろ情報処理の手前の理論へと改変できるからである。

意識が情報処理によって成立するのではなく、むしろそれよりも手前の段階の事象なのではないかという考え方は、山口裕之によって、すでに提起されている。山口（2009）は、認知哲学の立場から「意識とは情報を処理する以前に、処理すべき情報を設定する働きではないか（p. 276）。」と述べている⁸。

たんに生物学的に受容性を理解し、それを〈受容性の受容性〉として展開するだけでなく、わざわざ述語性と主語性の関係へと変換したのは、そのプロセスよってはじめて〈文〉の形式が成立するとことを示すためである。〈文〉の形式が成立してから、やっと命題や論理の抽出が可能となる。情報処理の基本である論理ということは、そこに至ってはじめて可能となってくるのである。

要するに、意識を論理の手前すなわち計算の手前すなわち情報処理の手前において発生する事象であると考えるのである。

10. 意識の階層性と自由

述語的受容性を受容して生まれる主語的受容性には一人称性の萌芽が備わっている。その場所ではじめて〈主語・述語の文〉の形式が生成される。〈受容性の受容性〉が、〈文〉の成立の背後にある。受容性の原理がさらに重なって高次の受容性が生成されることにより、一人称性が次第に強い一人称性へと成長していく。それと同時に、〈文〉の形式が複雑化していく。

〈文〉の形式が成立してから、命題と論理の抽出が可能になるのだが、〈文〉の成立自体の背景には、そもそも偶然性の受容があった。複雑な文章によって複雑な論理的思考が可能となっていくが、その基を正していけば、必然性とは正反対の偶然性の受容にすぎないのであった。

論理的な思考は、その原初的な発生の場所では、偶然性に基づいている。偶然性に基づきながらも、いったん〈述語と主語〉の結合から〈文〉が形成されてしまえば、そこから論理が抽出可能となる。受容性が高次化していくプロセスで、最初の〈文〉の生成と同様に前論理的構造から論理的構造が出現してくるという形の生成の仕組みが働くことも想定できる。その仕組み全体から、偶然的で前論理的な場所から論理的思考が可能となる一人称性の深化が成立してくる、という様相を見ることができる。

とすれば、一人称性が深化し同時に論理的思考が複雑化していくとき、そのプロセスは、いわばその基底となる物質的な必然性の支配から自由であると言えるだろう。

このようにして、環境の低エントロピー状態が、生命によって受容され、その受容性が重なって高次化していくことを通して、一人称性の意識が成長していく。その成長のプロセスが偶然性から始まる前論理的の論理性への変換という仕組みを備えていることによって、結果として成立する意識の思考は論理的でありつつそれ自体の自由な自律性を保持するに至るのである。こうして物質と精神が連続しつつお互いに自由であることが、科学的な範疇と矛盾することなく説明できることになる。

11. 結語に代えて

ここまでの理論では、はじめに提起された自己を虚しくして他者を待つという意味でのAttentionの問題は、科学的な範疇で扱うことができる範囲で、生物学的な水準での環境と生命との間の相互受容性の問題へと、言わばいったん非人間化された。しかし、前節の結論部分で到達したように、

受容性の重なりが高次化していくことで自律的で自由な論理的思考が可能となる。したがって逆に見れば、成長した自律的思考は受容性の高次化によるものなのである。とすれば、そこに現れてくる自由な思考が、受容性の人間的な展開となっていくことは、むしろ当然なことだと言わなければならない。

すなわち、はじめは環境と生命との間の物質的な水準でも観測可能な相互受容性であったのだが、受容性の重なりが高次化していくにつれて、次第に物質的な水準の支配から乖離していき、自由な思考すなわち自由な人間的な思考そのものでもある受容性へと成長していくのである。それがいつしか、Simone Weilの言うような、本来の意味での自己を虚しくしつつ他者を待つ人間的なAttentionの受容性へと変貌していく可能性について、誰も異議を唱えることはできないであろう。

注

- 1 Waldinger & Schulz (2023) は、幸福な生活を論じ、Simone WeilのAttentionの考え方を紹介して、「Attentionは寛大さの最も貴重で純粋な形である (Weil, 2002)」という彼女の言葉を引用している。またPanizza (2022) は、*The Ethics of Attention* で、Simone Weil と Iris Murdoch に学びつつ、Attentionの倫理的側面について語っている
- 2 川津は、すでに1994年に発表した論文で、対象からの感覚入力処理で特徴の分析をするニューロンの活動を、脳の言葉であり述語であるとする考え方を述べている (川津, 1994)。本論考では、基本的にその考え方を踏襲した。
- 3 ここで初期視覚の問題を取り上げたのは、それをきっかけとして言語になぞらえた知覚処理の新しい枠組みを導入するためであり、初期視覚を専門的に論じるためではない。
- 4 川津(2022)参照。
- 5 共感覚において、本来は結びつく必然性のない次元が結びつて感覚される現象は、本論考で、述語的記述が不安定に述語横断的に連結する可能として指摘したことと、理論的な親和性があると思われる。
- 6 Schrödinger (2017) と Monod (1972) はそれぞれの観点から、熱力学の第二法則およびエントロピーと生命との関係を論じつつ、生命による負のエントロピーの吸収の問題が徹頭徹尾科学的な範疇で理解可能であることを強調している。
- 7 偶然性からの負のエントロピーの供給ということ、不確実性のシミュレーションにより、それな

りに計算システムにおいても表現できるかもしれない。しかし、偶然性の重要な側面として、事象の一回性ということがある。一回性の受容性は、それを確率論的に塩梅してシミュレーションすることで表現することは不可能である。というのも、一回性はその一回性の確率論的な側面だけでなく、その一回限りの事象の個別的な内容そのものが、その後の展開にとって極めて重要な働きをすることがあるからである。確率論的な観点では、一回性の内容は掘り上げることができない。確率や統計学は基本的に多数の観測に関する学問であり、偶然性についても、多数の現象としての偶然性を問題にするにすぎない。しかし、偶然性の問題の重要な側面は、一回性としての、個物の運命でもあるのである。しかし、一回性の問題は、また別の機会に論じることとする。

- 8 山口 (2009) は、また、「情報とは一般性 (意味) であり、それは動機や感情によって設定されるものであるから、意識を持つものとは、動機や感情を抱くものではないか (p. 276)。」とも述べており、この点でも、本論考でのわたしの論旨と方向性が重なっている。

引用文献

- 乾 敏郎・阪口 豊 (2021). 脳の大統一理論 自由エネルギー原理とはなにか 岩波書店
- 川津茂生 (1994). 視知覚と意味をめぐる考察 教育研究 36, 199-210. (『生活と思索「先駆の二人称」から見た存在』北樹出版 2017に第一章 (pp. 3-15) として収録)
- 川津茂生 (2022). 言語に懷かれてある存在 教育研究 64, 107-115.
- Monod, J. L. (1972). 偶然と必然 渡辺格・村上光彦 訳 みすず書房
- Panizza, S. C. (2022). *The Ethics of Attention – Engaging the Real with Iris Murdoch and Simone Weil*. Routledge, NY
- Schrödinger, E. (2017). 生命とは何か 一物理的にみた生細胞 岡小天・鎮目泰夫訳 岩波書店
- 時枝誠記 (1941) 國語學原論 岩波書店
- Tononi, G., & Massimini, M. (2015). 意識はいつ生まれるのか 脳の謎に挑む統合情報理論 花本知子 訳 亜紀書房
- Treisman, A. M. & Gelade, G. (1980). A feature-integration theory of attention. *Cognitive Psychology* 12, 97-136.
- 土谷尚嗣 (2022). クオリアはどこからくるのか? 統合情報理論のその先へ 岩波書店
- 山口裕之 (2009). 認知哲学 脳と心のエビステモロジー 新曜社
- Waldinger, R & Schulz, M., (2023). *The Good Life and How to Live it – Lessons from the World’s Longest Study on Happiness*. Rider & Co. (口パート・

ウォールディングー, マーク・シュルツ. (2023).
グッド・ライフ 幸せになるのに, 遅すぎることは
ない. 児島修訳 Kindle 版.)

Weil, S. (1951). *Waiting for God*. New York, Routledge
Weil, S. (2002). *Gravity and Grace*. New York, Routledge